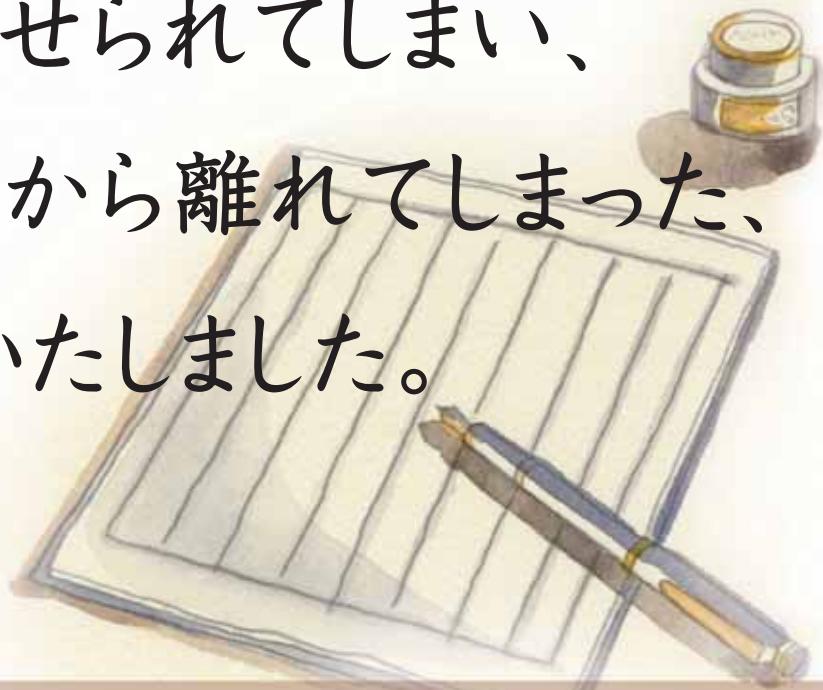


行きたくもないのに
むりやり船に乗せられてしまい、
すうっと岸壁から離れてしまった、
そんな思いがいたしました。



1982年 新潮社

Story

蔵王の Gondola・リフトの中で、勝沼(旧姓 星島)亜紀と有馬靖明は運命的に再会した。幸福だった夫婦はある事件により、離婚したのだった。亜紀は見事な紅葉を見たくて Gondola に乗り込んだのに、十年前に別れた夫から目を離すことができなかった。互いの胸に秘めた過去を手紙に綴り、未来へと向かっていく様子を十四通の手紙のやりとりによって表現した作品。

『錦繡』の由来

1977年太宰治賞と、翌年芥川賞を続けて受賞して作家のスタート台に立った宮本氏は、友人と二人で蔵王へ旅行に出かけた。しかし、上野駅で吐血する。死の恐怖のなかで、蔵王の燃えるような紅葉を見て、錦繡という言葉が心をよぎる。療養生活から数年後、健康を回復して小説『錦繡』を書き上げた。

きんしゅう【錦繡】

- ① 錦(にしき)と、刺繡(ししゅう)を施した織物。美しい衣服または織物。
- ② 美しい詩文の字句、また美しい紅葉・花などのたとえ。

(広辞苑第6版より)

書簡体小説について

手紙形式の小説をいう。ヨーロッパで最初の書簡文学は、12世紀の「アベールとエロイーズ—愛と修道の手紙」と言われている。18世紀フランスで盛んとなり、多数の書簡体小説が出現する。

書簡体小説の特性は、作中人物が手紙形式で直接相手に感情を込めて語りかけるといふ点である。ある事件・事実に直面する人物の主観的な判断や感想を相手に書き送るので、より強烈な印象を読者に与えることができる。

宮本氏は自身のエッセイ「命の器」の中で、「錦繡」を執筆する際、影響を受けた書簡体小説として「貧しき人々」(ドストエフスキー著)を挙げている。

過去は今、今は未来トつながっている。

主人公たちのように、過去に事情があって別れた2人がどこかで再会し、当時わかりえなかったことが、少しずつ理解できる。そんなことがあると信じたら、今、自分の目の前にある結果がすべてではないような気がした。

手紙氏が気づく距離感

亜紀が靖明に思いを伝える方法として選んだのは、全くことでも、電話をすることもなく、手紙だった。結果的に互いの距離感が近づいたのは、自分や相手の気持ちとじっくり向きあえる手紙だったからではないでしょうか。

Review